



発行責任者:保坂 義秀 (アーク福音ミニストリー代表、聖書キリスト教会長老)

発行所:アーク福音出版 285-0923 千葉県印旛郡酒々井町東酒々井 3-3-34

TEL043-496-2727 Fax043-496-2729 E-mail : ark-plan@cameo.plala.or.jp

ホームページ URL: <http://ark-fukuin.com/>

ゆうちょ銀行
記号 10560 番号 29284321
アーク福音ミニストリー

子どもは大切な主の働きの人

(その1)

みどり野キリスト教会

西村 内弘 牧師

横浜での教会開拓が三十一年を数えます。たくさんの主の祝福をいただき、教会のリーダーシップも次の世代にバトンタッチをする時期にさしかかっています。この時に、これまでの恵みを数え、更にこれから向かう方向を次の世代に届けるためにも、兼ねてから記録に留めたいと思いがありましたので、今回与えられましたこの紙面に、その一部を掲載し、主に栄光を御返しく願っています。

1、生い立ち



昭和十六年、第二次世界大戦が勃発した年に、長野県の片田舎に農家の子どもとして生まれました。後ろには山前には川が流れる大自然に恵まれた村で、四季折々の変化はとても美しい所でした。九軒しかない小さな集落で、いつも集落の仲間たちと遊ぶことが

楽しみでした。戦争のため、物資の乏しい時代でしたが、農家でしたから贅沢はできませんでしたが食べては行けましたし、また貧しい生活に対しても耐える力が養われました。

家族は祖父、両親、姉三人、兄二人で、私は末っ子でしたが皆に愛されて育てられました。通学路も片道一時間ほどで、遠い道のりをあたりの自然を楽しみながら、自分のしたいことや、将来の希望などを思いめぐらす時でもあり、大切な時間でありました。

机に向かって勉強をすることよりも、運動が大好きで、特に、近くのお兄さんに影響されて野球が大好きになりました。試合があると聞くところでも見に行き、中学に進んでからはついに野球部に入りました。高校の先輩からも招きの声がかかり、高校で硬球を握ることが目の前の目標でした。まさに野球少年でした。

2、信仰生活のスタート

四歳上の兄が中学三年の時、町にあった教会に行くようになりました。そのころ教会に、アメリカから若い婦人宣教師が来ていたようでした。兄は時折、教会の話をしたり、讃美歌のレコ

ードを聞かせ、また聖書を読んでいる姿も私は目にしました。家は農家ですから忙しく、労働力が必要なのに母は兄が教会に行くことを反対しないばかりか、応援していたようでした。

私は教会にはあまり関心がなく、好きな野球に夢中でした。兄は高校を卒業し就職のために家を離れることになる直前、私に教会に行くことを勧め連れて行ってくれました。私は運動と共に音楽が得意で、家で兄から聞かされた讃美歌は心に留まっていたので、一度教会に行つてからは、毎週賛美につられて通いました。それは私が中学三年生の時の事で年は十五歳でした。

当時、若い独身の牧師先生が日曜日の午後に中学生のためにクラスを開いていて十名程の生徒が出席していました。通い初めて二か月がたったある日曜日、他の生徒はだれも見えませんでした。牧師先生は私に個人的に関わって下さり、聖書を聞いてくださいました。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実でただしい方ですからその罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(イヨハネ 1:9)」

この聖書の言葉を聞いたとき、私は罪がたくさんあることが分かりました。それを告白してイエスにお祈りすれば赦してもらえぬこともわかりました。しばらくどうしようかと迷いましたが、神様が教えてくださった罪を、勇気を出して、牧師先生と告白してお祈りしました。お祈りの後、聖霊様が心に入ってくださいと、クリスチャンとしてのスタートが始まり、両親を初め、友だちのために祈り伝道する者だんだんと変えられて行きました。

あの日から間もなく六十年が過ぎ去りますが、今もあの日のことは鮮明に心に刻まれていて、時折この信仰の原点に戻ります。



3、使命を求めて

信仰生活が始まった時から、私の心に大きな変化が起きました。将来の夢についてです。野球少年だった私の心が、「イエス様を伝える伝道者になりたい」と変化したことです。

教会に行き、生まれて初めて牧師先生の存在に触れ、聖書から神様について、イエス様について語ってください、

また私に対していつも心開き受け入れてくださる人格に触れた事が変化の大きな要因でした。それから中学最後の一年、高校生三年間、野球部に入部するお誘いもお断りして、教会生活を中心とした生活に変わり、高校二年のクリスマスに洗礼を受けました。

家族への伝道の思いも強くされ、母も教会の集まりに出席する様になり、私の高校卒業の年に病気となって五十五歳の生涯を閉じましたが、入院中に牧師先生によって信仰に導かれました。

時を経て、父も信仰を告白し洗礼も受けて天に召されました。教会に連れて行ってくれた兄も一度は就職しましたが、神様のお導きを受けて福音宣教団に加わって働き、私の信仰生活に大きな影響を与えてくれました。

高校卒業後、父や長男が病気でしたから私は田舎に残って後を継ぐことが神様の御計画かと思いましたが、不思議なように道が開かれて上京することができ、川崎の地で開拓途上の教会に出席し教会生活が始まりました。

長野で生まれてから高校卒業までの十八年間、自由気ままな生活をしてきた私にとって、親元を離れ、自立の生活は簡単なことではありませんで

した。三月に高校卒業と同時に、ある企業に就職し朝早くから夕方まで働くという生活になり、天国から地獄のような思いでした。あまりの変化に人生の厳しさを味わい、時には違う仕事に移りたいとの思いもありましたが、何とか辛抱して五年間近く同じ職場で働きました。

そういう中で、日曜日の教会生活の大切さを実感し開拓教会の一員として積極的に教会の働きにも加わって、仕えました。長野から上京し、開拓教会に加えられた最初の時から、牧師先生は私に、日曜学校の働きの奉仕を与えてくださいました。当時五か所で日曜学校が開かれていて、そのうちの何か所を任されたのです。

実のところ、長野の教会でも日曜学校が盛んでしたが、私は関わったことがなく、本格的に担当奉仕をすることは初めてでした。信仰生活が始まって五年目、聖書の理解もまだまだ未熟な私でうまく進めて行けるだろうかと心配でした。しかし、毎週日曜礼拝の前に開かれるこの日曜学校は、一週間の生活の中で喜びであり楽しみでした。

田舎育ちの私にとって、都会の子どもたちとの出会いは最初、緊張感があ

りました。毎週、顔を合わせていくうちに、信頼関係も深まり、日曜日が待遠しくなり、祭日などには、ピクニックなどをし、少しでも交わりを深めようと努力しました。

私にとって毎日の厳しい会社生活はあまり楽しくはありませんでしたが、社会人二年目、成人式を迎えるころ、自分の使命は何かを考え始めました。一生会社で機械や製品に向かって働くことが神様の御心だろうか。

私には、人格のない物質を相手にして一日の大半を生きることは楽しくありませんでした。与えられた日曜学校の教師になって、幼い子どもたちと向き合う生活がうれしく楽しく、生きがいを与えられていました。

それでお祈りをし、また牧師先生とも相談するうち、児童伝道のために働く方向に道が開かれ始めました。具体的には学校の先生になることです。毎日子どもたちに会うことができ、信仰の導きもできると考え、会社で働きながら大学に通って、やがて教職の道に切り替えて行くことと決心しました。

社会人三年目から昼は会社、夜は夜学という生活が始まりました。自分の使命・目的がはっきりすると、生きが

いが与えられて少しへらい苦しいことでも乗り越えていけるものです。この時点で、幼子に仕えることが私の使命とつけとめて、その実現に向かって、新たな一歩が始まりました。

4、教育の現場から献身へ

経済的な戦いと常に戦いながら大學生生活も終え、目的の教職の資格も獲得し、長年働いた会社を退職し児童を相手にする教育の現場に入りました。多くの場合は国家試験を受けて公立の学校に進むのですが、児童に生活を通してイエス様の福音を届けたいのであって私立の小学校を選び、さいわいなことにミッションスクールではありませんが創立者がクリスチャンである学校に道が開かれて、就職と同時にクラスの担任となりました。

日曜学校は週にたった一度しかできませんが、学校は毎日、朝から夕方まで生徒と共に生活しますので、関係も深くなりますし、知恵を用いければ福音を届けるためにはどんなことでもできます。まずは信頼されるために、思い切り子どもたちと遊ぶ時間を取りました。子どもは一緒に遊んでくれる大人が大好きです。

例えば休み時間や放課後に遊ぶ。体育の時間は二時間連続です。休日には遊園地や夏にはプール、冬にはスケート場、秋には父兄も一緒にハイキングなどなど、楽しいプログラムをたくさん用意しました。ですから親からも信頼されて、親のためにもスポーツ大会なども計画しました。

昼食時には聖書物語を読んで聞かせたり、月曜日の一時目は聖書の話をしてあげたり、夏の教会のバイブルキャンプに連れて行ってあげたり、校内では、クラス、学年を越えて、有志を集めて合唱隊を作り、折々の行事にステージに立ちました。(その当時の生徒は、現在五十歳をこえています)が、今も関係が続いている方もいます。()

そのうちに信仰に導かれる者も起こされて、私の教会からは離れていきましたので、学校の近くの教会を紹介したりして、教会につながる者も起こされました。心が柔らかく素直に福音に応答する子どもたちとの生活を通して、児童伝道の必要を肌で感じ、年間教育の現場で働きました。

そこで見えてきたことは、教会が子どもへの伝道にもっと力を注ぎ、本気で向き合い、小学校、中学校、高校と継

続して育てていくことが必要であることでした。すなわち、教会で学校をしていきたいとの思いです。教師の生活は、福音の種まきはできませんが、養育は教会でしなければならぬとわかりました。さいわい同じように子供の伝道に重荷を持った家内と出会って結婚し、使命が明確になったら献身して伝道者の道を歩みたいとの心が与えられていましたので、教師を退職し教会献身に進みました。

教会は幼稚園をしていましたので、幼児教育のお手伝いをするようになりました。小学生より幼くて難しいと思われましたが、一緒に生活をしてみたら、福音もわかるし、更に素直だし、幼児の伝道の必要さもわかりました。()
このでの生活の中で、

「次のような主のことばが私に有った。『わたしは、あなたを胎内に形造る前から、あなたを聖別し、あなたを国々への預言者と定めていた』(エシミヤ1:4, 5から)」「
のおこばを頂き、伝道者としての主からの召しを確信しました。

振り返れば、十五歳で信仰に導かれた時に主が私の心を与えてくださった、「伝道者になりたい」との思いが、三十歳後半になって実現したのです。

幼稚園での働きが四年間続いたのちに道が開かれて、神学院への道が開かれ、入学しました。

時に長男は小学二年生、長女は教会の保育園在園中でした。

(次号に続く)



奉仕の喜び

大家 典子(教会奉仕者)

東京バプテスト教会に来て七年、奉仕をさせていただいて六年になりますが、いまだに教会奉仕の喜びは、冷めることなく、当初と同じ気持ちを維持できていることに、自分でも驚いています。そして気づけば、奉仕の数が増えています。

最初に始めた奉仕は、現在も続けているジョイ・カフェという奉仕でした。礼拝やイベント(イースター、クリスマスコンサートなど)の後にジョイ・

カフェ内でノンクリスチャンやゲストたちと個人的に交わり、感想や質問を聞いたり、共に祈り合う奉仕です。もちろんノンクリスチャンの場合は、トラクトなどを用いて積極的に福音を宣へ伝えていきます。

その一年後にモバイル・J・カフェという奉仕も始めました。これについては、はこぶね(四八号と四九号)に書かせていただきました。それからゴスペルフラダンスという奉仕にも参加するようになりました。これはダンスチームの中に属していますが、ワークショップやコンサート、イベントで踊ることで、神さまへの愛と感謝を表現します。

さらに最近正式にミニストリー(奉仕)として登録されたランニングミニストリーにも所属しています。ランニングの好きな教会のメンバーたちが同好会のような形で楽しんでいただくのが正式に教会の奉仕となったのです。ランニングを通して伝道する奉仕です。いつのまにか、四つの奉仕に携わるようになってしまいました。でもひとりですぐぐつもの奉仕に携わっている人は、少なくありません。

簡単な私が所属している教会の奉仕について説明しますと、教会の会員となった者が奉仕をしたいと考えたとき、クラス201を経て、クラス301に参加します。そして教会の、神さまが望んでおられる場で奉仕をする機会を見出せるようガイドを受けます。そして自分が興味をもった奉仕のリーダーと連絡を取り合うことができるように、クラス301のスタッフが助けてくれるのです。

また五月には、年に一回のミニストリーフェアが催されます。駐車場内にテントを張って、各ミニストリーがブースを与えられ、ミニストリーの宣伝をすることができます。具体的にどんな種類の奉仕があるかわかり、また各ミニストリーのスタッフと話すことができるので、奉仕を探している人には良い機会となります。奉仕の種類が約四十あるので二日に分けて行われ、その雰囲気はまるで大学の文化祭のようです。このミニストリー全般をまとめてリードして下さっている牧師がおられるので、これほど多くの奉仕が混乱もなく運行されているのだと思います。

私、モバイル・J・カフェのリーダーをさせていただいてますが、他のミニストリーと助け合って、連携することですらに良い結果を出すことができますことを学びました。私たちは、イエスをかしらとするキリストの体の一部であるので、互いに助け合うことで正しく効果的に機能できることを体感しています。

「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」第一コリント十二章二七節。

一つのミニストリー(奉仕)だけではできないことでも、いくつかが一緒にあって助け合うことで、奉仕の幅が広がります。その他にも他の奉仕のリーダーたちと常に連絡を取り合うことが大切です。

たとえば、モバイル・J・カフェに初めて来られたノンクリスチャンに、教会の説明をして礼拝に参加したいと興味を持ってくれたら、その人がいつ何時の礼拝に参加するかをジョイ・カフェのスタッフたちにメールで知らせます。すると誰かがその人をフォローアップしてくれるのです。

礼拝後ジョイカフェで、その人とフエロシップを持ち、その人がさらにキリストについて知りたいと求めるならば、そのための聖書の学びのミニストリーであるグッド・ニュース・クラスを紹介し、そのスタッフに知らせます。フォローしたスタッフは、結果をジョイ・カフェのスタッフ全員にメールで報告します。

また教会のメンバーであるなし関係なく、信仰を持って間もないクリスチャンで、友だちがいない人たちには月一回行われる meet and connect というイベントを紹介し、友だちを作る機会を提供します。 meet and connect のスタッフにも紹介した事を知らせておきます。

私自身もこのイベントに行き、紹介した人が来ていればスタッフたちにつなぎ、またその場にいる教会の友達に紹介します。教会に友だちができる教会に来やすくなり、楽しくなるからです。そこには牧師たちもいて、お菓子を食へながらフエロシップを楽しみます。

このように他のミニストリーと連携して奉仕することで、一人のノンクリスチャンが救われ、洗礼を受け、友だちも増え、教会の奉仕をするようになる、その成長していく兄弟姉妹を見ると、キリストのからだの器



官として互いに助け合うことの大切さを実感します。

神さまは、私に、熱心に奉仕をしていただくさんの兄弟姉妹と出会わせてくださいました。皆に共通していることは、どの兄弟姉妹も奉仕に喜びをもって自発的に参加していることです。神さまのために奉仕しているのだという誇りが感じられるのです。私は、このような兄弟姉妹と互いに助け合い、愛し合い、祈り合いながら共に奉仕ができ、ほんとうに感謝です。彼らと奉仕している喜びが湧いてくるのです。

年に一〜二回、ミニストリーのリーダーが集まり感謝会があります。その時のごちそうはホテルのビュッフェのようですが、アプリシエーションチームがいつも料理をしてくれます。

多くのメンバーが、それぞれの賜物を用いて仕え合うとき、想像をはるかに超えた事ができています。主の栄光を表すことができる。それをこの教会で学んでいます。

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまたまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」第一ペテロ四章十二節

キリシタンの世紀を生きた人々⑪

平山 公司牧師
キリシタン史愛好家

私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によりみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。

第一コリント十五章三〜五節

キリスト教の中心であるキリストの福音の中心は、「人格と御業」、その最たるものが十字架上の死と復活です。しかし、初代教会の時代にはコリント教会のように、キリストの復活を疑っていた人もいたようです。パウロは、復活が事実であることを教えるために、彼が宣べ伝えた福音とは何であったか彼らに思い出させています。

まずキリストは、聖書の示す通りに私たちの罪のために死なれたということ。恐らく、パウロの心にはイザヤ書五三章五〜六節、詩篇十六篇八〜十一節などの聖句があったのでしよう。また聖書全体がメシヤの死を指し示しているとの確信があったので

しよう。

パウロは、金曜日の午後に死なれたキリストが墓に葬られ、三日目の日曜日の朝よみがえられたことを最も大切なこととして伝えられたのです。

復活のキリストは、①まずケパ（ペテロ）に、それから十二弟子に現れて下さいました。②次から、キリスト教が始まったのです。③次に五百人以上の兄弟たちに姿をお見せになりました。その大多数の者はまだ生き残っていて、「コリント教会の中にはこの目撃者の中に友人や知り合いがいた人もかなりいたと思われます。④更に、主の兄弟ヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。⑤そして最後に、教会を迫害していた自分（パウロ）にも現れて下さったのです。

パウロは自分のことを『月足らずで生まれた者と同様な私』と呼んでいます。逆説的に、パウロが不完全であったことは、そのまま神の恵みがいかに豊かであったかを表していると言えます。

現在の私たちには、キリストの復活が事実かどうかを確かめる術はありません。しかし、復活の目撃者となったイエスと同時代の人々が、その真実性を証言してくれています。信じない

者にならないで、信じて永遠の命の希望を受け取る者となりましょう。主イエスは今も生きておられるのです。

最初のキリシタン大名大村純忠(3)

改めてイースター（復活祭）おめでとうございます。

冒頭でご紹介しましたように、イースターはイエス・キリストが十字架に付けられ、葬られた日（受難日）から三日目に、甦られた日を記念してキリスト教会が祝うお祭です。その起源はクリスマスよりも古いのですが、クリスマスと違って、春分後の満月直後の日曜日に行なわれる移動祝祭日で



復活のイエスを迎える喜びの天のエルサレム

毎年違うため、日本ではあまりよく知られていませんが、クリスマスと同様に最も大切な行事です。

日本では、大村純忠が関わった一五六三年（永禄六年）の四月に行われたイースターが日本最初のイースター（この頃はポルトガル語でパスコア）、今回はその模様を少し詳しくご紹介したいと思います。

ルイス・デ・アルメイダがポルトガル修道士として初めて横瀬浦にやってきたのは、一五六二年（永禄五年）でしたが、翌年の三月頃には、既にゆるぎない信仰の灯が点っていました。受難週に入ると枝の主日（復活祭の一週前、プロテスタントでの棕櫚の主日）から木曜日まで、毎朝説教が行なわれました。

聖金曜日（受難日）には聖体（カトリック教会のミサでは特殊なパンを聖別し、キリストの体の実体として信じられ、食べられるもの）が出されるまで人々は会合し、土曜日には預言書を唱和し、ことばの典礼、洗礼式、感謝の典礼と続きました。

この週間で、純忠は度々大村から横瀬浦を訪ねました。土曜日には大村に帰りましたが、ファン・フェルナンデス修道士が、布教長のコスメ・デ・ト

ーレスに代り訪問しています。

復活祭の当日、日の出の一時間前、修道士フェルナンデス、アルメイダ以下の教職者とキリシタン信徒らは、皆祭用の服装を着飾り、頭に花輪を載せて集って来、教会では手に手に口ウソクを持ち、喜びにあふれて行列を組んで行進しました。行列が向かう十字架に上る道の両側には、多くの高い樹木に口ウソクを吊るし、日本風に香を炊いた小さな聖堂も設えてありました。この道の両側に、ポルトガル商人たちは高い樹木を立て、これに多くの提灯、行燈を吊るしましたので、真昼のような明るさでした。キリシタンたちは花輪を携えてゆつくりと歩き、ポルトガル人は、時折、号令や合図をしながら行列を誘導し、修道士たちは讚美歌を口ずさみながら進みました。ミサが終了すると、一同は先日来の疲れもあり足早に散会しました。

このように、日本最初のイースターは、長崎県西海市にある横瀬浦で行われたのです。一年前までは一・三軒の小屋しかなかったこの地で、日本で最初のイースターの盛大な祭典が開かれたことに、関係者一同は等しく感無量の感慨を禁じえなかったことであらうでしょう。

(続く)

2016	年	3	月	27	日
2017	年	4	月	16	日
2018	年	4	月	1	日
2019	年	4	月	21	日
2020	年	4	月	12	日
2021	年	4	月	4	日
2022	年	4	月	17	日
2023	年	4	月	9	日
2024	年	3	月	31	日
2025	年	4	月	20	日
2026	年	4	月	5	日
2027	年	4	月	3	日
2028	年	4	月	16	日
2029	年	4	月	1	日
2030	年	4	月	21	日

イエスさまの十字架と復活

東畑 忍（農村伝道者）

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう。」「こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。

使徒行伝一章九節・口語訳

イエスさまは、十字架上で祈られた崇高なゆるしの祈りと、打たれた傷と流された血汐によって、救いのわざを成し遂げられました。

十字架につけられた時、左と右に犯罪人も十字架につけられました。

犯罪人のひとりにはイエスさまに悪口を言います。ひとりは彼をたしなめて言います。

「われわれは、自分のしたことのむくいを受けているのだからあたりまえ

だ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ」そして言った「イエスさま。あなたが御国の位にお着きになるとときには私を思い出してください。」イエスさまは彼に言われた。「まことにあなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスに入ります。」

ここにどんな人でも、死の間際でも、イエスさまにおすがりすれば天のみに生かされるという神さまの大いなる愛が示されています。

そして、このことは後世にまでも影響を与えています。現在の日本でも、ホスピスという末期の人を看取るキリスト教系ホスピス病院では、専属の牧師が患者さんに、安心して死をむかえられるようにキリストさまの福音を伝えていきます。

この十字架の愛は永遠に不滅の救いの業として世の終わりまで続くのです。

神さまの力によって三日目に死から復活されたキリストさまは、四十日にわたって弟子たちに現われました。そこで神の国のことを語り教え、ご自分が生きていることを弟子たちに示されました。そして「あなた方は地の果てまで、わたしの証人となります。」

と言われたことはが弟子から弟子に
と受け継がれて二〇〇〇年の時を経
ても消えることなく、キリストの福音
が世界中に伝えられたのでした。そし
てこの地に届けられ、我が町にもキリ
ストの教会が建てられたのです。

復活されたキリストさまは、ガリラ
ヤの地で多くの人の見上げる中、天に
と昇って行かれました。この復活のキ
リストさまはいまも生きておられま
す。天に昇って行かれたキリストさま
は、全能者なる神の右に座し一切の権
威をもってさばられます。又、信じる
者の祈りを、全能者なる神さまにとり
なしてくださるのです。

私たちの信仰は、いまも生きておら
れる復活のキリストさまにあるので
す。これらのことは、聖書の中に書か
れてあることを至極簡単に一口にま
とめたのです。

恵みの雨のひ
とすくすくし
てでもお受け
くだされば幸
いです。

(農村の一軒
一軒にトラク
ト配布するた
め作成)



あさ子さんの救い

保坂 恭子牧師

神のなさることは、すべて時になっ
て美しい。

伝道者の書 三章十一節

あさ子さんは夫の母、つまり私の義
母です。じき89歳、生まれ故郷で暮
らし、「あさ子さん」と呼ばれています。
その救いを確信させていただいて、私
たち夫婦の胸底に沁みわたった神さ
まのご愛を証させて頂きます。

かれこれ十年前、義父が亡くなった
あと、三男である夫が扶養を引き受け
義母が一時、千葉の私たちの家に来ま
した。他の息子や嫁への恨みつらみで
いっぱい、愚痴と練り言ばかりでした。

私はイエスさまの話をしました。罪
の意味も話しました。憤懣やるかたな
い自分の心の内側を考えたとき、自分
の罪が理解できたようです。イエスさ
まを信じればその罪は赦されて天国
に行けるよ、「だからおかあさん、イ
エスさまを信じて」という私に、あさ
子さんは「うん、私もイエスさまを信
じるよ」といいました。死後は息子と
同じ所へ、と思ったようでした。

それまでのあさ子さんはクリスチ
ヤン(キリスト教)は嫌いでした。親

戚も近隣もクリスチャンには後ろ指

特に嫁にはあまり口をきいてくれま
せん。見て見ぬふりをされたり聞かえ
よがしの悪口をいわれたりのが普通の
土地柄です。この土地で生まれ育った
息子がキリストなんぞになるとは、他
所の生まれの嫁が悪いと思っっている
でしょう。この21世紀に！

千葉ではあさ子さんは当時の私の
奉仕教会で礼拝を守り、食事の時は一
緒にアーメンし、でも毎日の聖書日課
には「わたしや難しくて分らん」と逃
げてしまいました。夫のいるときは
神妙に聖書を聞いていたのに、田舎に
帰ったら忘れたようにお寺やお墓の
心配ばかりです。これは表面だけだっ
たのか？と思いました。

江戸時代の禁教令のなかでも「五人
組」という相互監視制度は実に効果的
で、徳川直轄領の山梨は殊の外それが
厳しかったのか、今でもキリスト教嫌
いの激しい田舎です。クリスチャンの
息子に老後の面倒を見てもらうと知
った人たちからあさ子さんは随分ひ
どく言われ、お寺にある自分の家の墓
にも入れないと言われて肩身が狭く
なったようです。それでもクリスチャ
ンである三男と嫁に自分の老後を託
すしかなく、板挟みの苦しみだったの

でしょう。

「俺たちが引き受けて扶養するとい
うことは、葬式はキリスト教式だから
な。それでいいんだな」と念を押され
「それでいい」とは言ったものの一時
期ひどい鬱症状を呈しましたし、通院
の付き添いや買いだしを助けてくれ
る向こうの教会のK姉の身元は近所
にはマル秘でした。

「私は聖書の話はしませんからね。そ
うでないとおあさ子さんは安心して私
と一緒にいられないでしょうからお
気の毒です」と彼女は言ってくれてあ
さ子さんは結局、頼れる相手はクリス
チャンしかいないのに、それでも生ま
れ故郷がいいと独居を続け、私たちが
千葉から通って五年目。K姉が病に倒
れ、あさ子さんは認知症を発症しまし
た。「私はどうなる？」という不安が
引き金になったようです。

この十年間、夫婦であさ子さんの救
いのために祈りながらも「道ばたに落
ちた種だったの？それともいばらの
中に落ちたので周りへの気遣いでふ
さがれてしまったの？」と諦め顔して
いた私たちは不信仰でした。それでも
母のお世話をよくすることは近隣の
お眼鏡には叶ったのか声をかけて下
さる人が増えました。荒れ地の石を捨

い続ければ良い地が変わって、いつかは種がまかれるかもしれませぬ。

そんな中、帰省時には礼拝に出席しているハレルヤ教会の谷井牧師が母を訪問して下さって交わりと聖書のお話。いつもあさ子さんは「私は難しいことは分からんから」と言うばかりだったのが、十一月には「はい、信じます」と言ったそうで、谷井先生から大喜びの電話「あさ子さんが救われましたよ」。本当に驚きました。

信じられなかったではありません。それでは神さまは、あさ子さんを掴んでいてくださったのだ！

十年も知らん顔していても神さまは見捨てず、あさ子さんにとって一番いいとき、認知症の人はかりのホームでキリスト教がどうのと騒がれることもない今、この言葉を言えるようにしてください。なんとこの神さまの深いご配慮であることが驚きました。

イザヤ49章15節に「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」とある通りです。

義母の老後を見ると決めたとき葬儀の喪主でも、故人が信じていなか

れば何か偽善のような気がします。しかし、あさ子さんの救いが確認されてこの重荷は下ろされました。

認知症発症後も頑張った独居もついに無理、でも山梨にいたいあさ子さんは近くにできた認知症対応型グループホームで楽しく暮らし、本人は覚えていなくても救いは確かです。

日本の田舎はどこも大同小異、親の救いを祈っても無理！と内心思う人は多いでしょう。でも神さまは掴んで下さった手を離されることはありません。恵みと憐れみ豊かな主の尊い御名を賛美し、御栄光を主に帰します。



一粒の麦

武間 恵洋牧師

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば豊かな実を結びます。

ヨハネ福音書十二章二四節

秀吉のキリシタン迫害によって殉教していった長崎の二十六聖人。

その中のルドヴィコ・茨木はまだ十二歳の少年で、刑場に引かれる姿を哀れんだ一人の武士の「お前の信心を捨てなさい。そうすれば、ご赦免を願って私の養子として迎えよう」との申し出に「あなた様がキリシタンになって、一緒に天国へ来て下さるといいのですが」。そう言ってルドヴィコは十字架の上で聖歌「主をほめたたえよ」を口ずさみつつ召されていった。

三百数十年後、ドイツ北部の小さな町の図書館で十二歳のドイツ少年がこの殉教の出来事を知った。この時から彼の心に「必ず将来このような人物を生んだ日本に行く」という熱い情熱と固い決心が沸きあがった。

それが上智大学で長い間教鞭をとったアルフォンス・デーケン氏であった。「サヨナラ」「フジヤマ」たった二言しか知らなかった彼が今では見事な日本語を操り、日本に「死生学」を定着させたことで菊池寛賞も受賞され、日本と日本人に対する深い敬愛と感謝の念を持ち続けて日本の若者の教育に生涯を捧げておられる。

氏の全ての原動力はあの殉教していった一人の少年の最期の姿だった。

無残に殺されていくのを見ていた人々や、ましてや処刑を命じた秀吉に、何百年も経ったそれも遠い外国の地で、このような信仰と生き方の継承が起きるとは想像だにできなかったろう。「一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば豊かな実を結びます。」

(ヨハネ12・24)

天の御国にはイエス様の御言葉の真理を強く受け止めつつ、微笑んでいられるあつろルドヴィコ」ら信仰を全うした人々がおられる。



編集後記◎イースターおめでとうございます。今号の「はこぶね」は伝道のおさまさまなアプローチに添えて下さる神さまの祝福の証です◎内村光弘牧師の子ども伝道にかける静かな情熱。かくも長い準備期間をもってこの重要な伝道の現場に赴かされたことに神さまの熱意を感じます。次号は子ども伝道の実践について。待望します◎植草榮一牧師は4/11網膜黄斑変性症で手術の予定。お祈り下さい。◎「一粒の麦」は中井町友愛教会の武間記恵洋牧師の著書「パスター」"B" "C" "D"のメモから。感謝です◎東畑兄はJTC宣教神学校を卒業後、農村伝道に献身。「若い頃は教会の話は出来なかった。田舎はみんなそうです」。歳を取った今こそ働き時、主が尚々お用い下さいますように。Y・H記